江戸日本の街道探訪４

東海道　舟渡しと渡り

舟渡し

* 東海道で舟渡しが実施された川は、六郷川（多摩川）、馬入り川（相模川）、富士川、天龍川、それと今切の渡し（浜名湖）、七里の渡し（宮から桑名へ伊勢湾岸運行）…である。
* これらの川の渡し口には、舟会所が設置されており、旅人たちはそこで渡し賃を支払って舟に乗った。
* 料金は、旅人一人10文。馬付き（本馬一駄口付き）15文。乗り掛け荷物（馬の両側に荷物を渡し、さらに人一人）12文とある。一文約30円とすると人一人300円である。
* 広重は、「本郷の渡し（多摩川）」大名行列の舟渡りの場面を描いている。画面では10艘の舟が行き交いしており、舟には20人余りの武士が乗り、ぎゅうぎゅう詰め状態。この大名行列は六郷川を渡り、川崎宿に､向かっているようだ。川崎宿の方では庶民が土下座して迎えている。一方、川の手前を見ると、まだ残りの武士が行列のまま待っている状態。大名行列の舟渡りの図は珍しく、壮観である。
* ■図1　東海道名所風景１４：広重：川崎宿：本郷川を渡る大名行列：国立国会図書館

渡り

* に担がれて渡る。これが渡り（歩いて渡る）である。酒匂川、興津川、安倍川、大井川。いずれも広い河川敷を持った河川に適用された。家康は江戸防衛上の軍略から、これらの川の渡船も禁止した。その後、江戸が安定し､そうした考慮が不要になったと思われたが徒歩渡りは、中止されず、なんと明治維新まで続いたのである。
* 徒歩渡りの方法には3種ある。まず、越。これは人足が旅人を肩車して川を渡る方法である。二つ目は、（輦台＝連台）。客を輦台に乗せ、人足が担いで渡る方法である。三つ目はと言い、人足が客を誘導して渡る方法。

越し

* は5種の型が決められている。まず、平輦台（平板の並連台一人乗り）。次に平輦台（並連台二人乗り）、半高欄輦台（半手すり二本棒）、中高欄輦台（四方手すり二本棒）、大高欄輦台（四方手すり四本棒）。輦台の重さと大きさに応じて担ぎ手の人数は増える。費用は基本的にの数に応じて高くなる。
* 川を渡るにはまず川会所で「川札」を買わねばならない。これはまたはともいい、人足一人を雇うためのチケットである。旅人は自分の条件に合わせて、川札を買う。
* 川札の値段は、その日の水深（水嵩）によって決定される。このため日々、の定点観測を実施し、その結果、水嵩が人体のどこまできているかによって五段階の価格設定がなされた。このため、川札の値段は毎日異なった。価格は次の五段階。寛政年間の設定では：一、（水が股まで）４８文（約1440円）、二、通（水が下帯の下まで）52文（約1560円）、三、通（水が下帯の上まで）68文（2040円）、四、（水が乳まできている）78文（約2340円）、最後が五、脇通（水が脇まで来ている）94文（約2820円）。これ以上水嵩が増すと、危険のため川留め（川渡り禁止）と云うことになる（大井川、島田観光協会：一文30円計算）。
* これが川越人足一人の値段である。これに輦台の種類によって決められている担ぎ手の人数を加算して、必要な川札数が決定する。

渡り賃算出の基礎となる人足数の決定

* 肩車（かたくま）：川越人足の肩に乗るので川札1枚（水が一定レベルを超えると手張り（補助者）を要するので川札2枚となる）。
* 平（一人乗り）：基本的に担ぎ手4人で川札4枚。それに台札（輦台の使用料）に川札2枚。計6枚。
* 平輦台（二人乗り）：担ぎ手６人、台札2枚で川札計8枚。
* 半高欄輦台：平輦台（二人乗り）と同じ価格。川札8枚。
* 中高欄輦台（四方手すり二本棒）：担ぎ手10人、手張り（補助）2人の12人と台札（川札24枚分）の川札計36枚
* 大高欄輦台（四方手すり四本棒）：担ぎ手16人、手張り4人、台札（川札32枚）の計52枚。
* したがって、大高欄輦台を所望し、その日のが最高位のだと52枚×94文で4888文（約１４万６６４０円）という途方もない値段になる。ということは、大名行列の川渡りに一体いくらの金がかかったことか。恐ろしい費用が想定される。

大井川を渡る

* さて、それでは川渡りのモデルケース、大井川の光景を紹介しよう。大井川の渡しは、いわば東海道の名物。江戸時代の絵師はこぞってその様子を絵にした。
* それにしても、歌川国久が安政4年3月に描いた、錦絵「東海道　大井川の図」は、リアルでエキサイティングである。まるで大井川は、大海原のように描かれている。水嵩は川越人足の脇近くまで来ており、この日の料金は、最高ランクに近いと思われる。絵の前面にご婦人を運ぶ渡しが強調されている。その後ろに殿様籠を乗せた大きな輦台が見え、参勤交代の家来の輦台も混じっている。遙か先には富士山が映え、美しい自然の光景である。しかしこの絵のメインは女性が乗った輦台越の華やかな列にある。輦台に乗っているのは、いずれもご婦人で、豪華な着物に身を包み、まるでファッションショウ。輦台も出そろっており、一人乗り平輦台、枠付き輦台、二人乗りの枠付き輦台、旅籠ごと乗せている大型輦台と輦台のオンパレード。大きな荷物と一緒に輦台に乗っている大名行列の家来も見られる。
* 川越人足は皆、屈強な身体をしており、片手は輦台棒を担ぎ、一方の手は水を漕いでいる。その水漕ぎの手が3人、4人見事に揃っており、川歩きのリズム、バランスのプロを感じさせる。輦台の上では、悠然とキセルを吸っている女性の姿もあり、男を従えているかのような、肝の据わった婦人のユーモラスな表情が印象的である。向かい合わせに座るご婦人二人の輦台もあり、笠を被っている女性、笠を手に振りかざし、日差しを避けているかのように見える女性の輦台も見える。いずれの女性も大井川の渡りを大いに楽しんでいるかのようである。担ぐ川越人足の方も客が女性とあって、元気横溢の様子。
* ■図2　歌川国久：「東海道川尽　大井川の図」：天理参考館

大井川を渡る大名行列

* 大名行列の川渡りともなれば、駆り出される人足の数もはんぱない。大名行列の川渡りの実態を見事に描いているのが、芳盛の「大井川を渡る大名行列」の図である。その規模の大きさは凄い。一行は島田宿を出て大井川を渡り金谷の宿に向かうようだ。いずれの大大名であろうか。数えきれぬ程の川越人足が動員されている。殿様の豪華な籠も凄ければ、輦台も豪華。まるで広い大井川に人列の橋が出来ているかの様である。大勢の人足に混じって、家来が輦台、もしくは肩車で運ばれている。列の一番外側に人足が二列で並んでいる。これは殿様の輦台の揺れを少しでも安定させようとする、人垣である。大名行列ともなれば、道具を乗せた輦台も多数。また長い毛槍（鳥の羽などで装飾した槍）だけを担いでいる人足の姿もある。渡り終えた行列は、次の金谷の宿に向かって急坂を上っていく。これがまた半端無い急坂でダイナミックな展開。参勤交代の行列が藩の権威を誇示する典型である。
* ■図3　東海道名所風景６４：芳盛：大井川を渡る大名行列：金谷
* 一方の国綱の絵は、川の手前で武士を肩車に乗せている姿や輦台に乗せて、しずしずと川に向かう姿、あるいは、行列のまま待っている様がリアルに描写されており、大井川渡しの島田宿側の姿が強調されている。絵にはないが待っている侍の手前に川会所（川札の販売所）や川越人足の待合所（番宿）がずらりと道の両側に並んでいるのだ。
* ■図4　東海道名所風景６３：国綱：大井川を渡る大名行列：島田

川越人足市場の醸成

* 大井川徒歩渡しで栄えた島田宿。宿場から大井川に向かって道の両側にずらりと川越人足が待機する番宿が並ぶ。一番宿〜十番宿。一体何人の人足がいたのか。このようには、人足という新職業を生み出し､大きな市場を醸成することになる。また舟渡しも舟や船頭の増員につながった。東海道の「川の徒歩渡り」は、ひとつの文化となり、参勤交代の大名行列は、ここでも街道に大きな経済効果をもたらすことになった。